

裏通りからもう一本、奥の道に入ると途端に道幅が狭くなる。酒入は曲がり角にあるビルの三階にある店に入った。店名は片仮名だったので読めなかったが、中に入った途端、ハワイアンのような音楽が聞こえてきた。観葉植物が所狭しと置かれ、壁にはハイビスカスの造花が飾られている。

「ここ、ハワイアンバーなんだよ。俺、ワイハが大好きで、マスターと意気投合しちゃってさ」

穴場なのか、それとも単に流行^{はや}ってないのか、ハワイアンバーは他に客が一人もいなかった。陽気な音楽の流れる寂しい店で、店の壁際にあるテーブル席へついた。

酒入は店に入るなりバドワイザーを注文し、カウンターで受け取るとその場でゴクゴクと飲みはじめた。途端、ググツと眉を顰^{しん}める。

「ちよつとこれ、温^ぬいよ」

酒入が怒鳴ると、マスターは「ごめん、ごめん」と笑っていた。このバーは間違いなく流行^{はや}っていないとアルは確信した。

「そーいやさっきの話の続きなんだけどさ、暁の野郎はケインさんをメディアに露出させたくないんだよ」

三谷は手許のジンジャーエールを一口飲んだ。

「ケインは俳優なんだから仕方ないんじや……それにメディアに出るかどうかを決めるのは本人でしょ」

酒入はふーっとビール臭いため息をついた。

「ケインさんは暁に逆らえないんだよ。……まあ、こんなにかっこいい彼氏じゃ、テレビに出演して人気が出たら嫌だっというあいつの気持ちもわからんでもないけどさ」

話を聞いていた三谷がゲホゲホツとジンジャーエールでむせ込んだ。

「彼氏って……高塚さんとケインって付き合っているの？」

酒入が「うわああつ」とびっくりするような声をあげ、両手を顔の前でパンと合わせた。

「ケインさん、ごめん。うっかり口が滑^{すべ}っちゃった。ばらすつもりはなかったんだけどさ」

「ぼくとあきら　つきあってない」

恋人同士になりたいと思っっているがまだ相思相愛ではない。

「えっ、でも恋人同士なんだろ？」

酒入が突っ込んでくる。

「こいびと　ちがう」

「けど一緒に住んで、ニヤンニヤンしてる仲だろ？」

アルは軽い響きを持つ言葉^{はなす}を反芻しながら、脳内の日本語辞書を探してみた。

「にゃん　にゃん　ねこ？」

酒入と三谷は黙り込み、互いに顔を見合わせた。

「酒入さん、そこにはあまり立ち入らない方が……」

三谷が神妙に呟き、酒入も「そつ、そうだな」と上擦った声で笑った。

「ケインさん、俺が言ったことは忘れてくれ」

「きになる　にゃんにゃん　ねこ　ちがう？」

「にやんにやんって、エッチのことだろ？」

アルにトマトジュースを持ってきてくれたマスターが、微笑みながらサククリと答えてくれた。エッチ……というと、セックス。アルは恥ずかしさのあまり顔がカーッと熱くなった。

「ほく あきらと してない！」

「えっ、一緒に住んでるのにプラトニックなのか！」

酒入が驚いたように問い返してくる。

「あきら だめっという おこる」

酒入は目を大きく見開いたまま「ハーツ」と息をついた。

「……あいつはどうしようもないドSだな。まあ、撮影の時から、ケインさんに対する態度にそれっぽい雰囲気はあったけど……」

「俺、何となくわかりますよ」

静かに事の成り行きを見ていた三谷が、おもむろに口を開いた。

「高塚さんて、エンバーマーじゃないですか。死体とまっすぐに向き合うって、普通の感覚じゃ無理だと思っただけですよ。そういうところにサド的な気質があるんじゃないですか」

「言われてみればそうだな」

酒入は納得したように腕組みしたまま頷く。そしてまっすぐにアルを見た。

「ケインさんさあ、どうしてあいつがよかったんだ？」

何が何だかよくわからないうちに、暁は「サド」だと決定づけられている。

「あきら やさしい おこりっほい けど」

「……サドっていうのは、厳しさと優しさの加減が絶妙だっていうからな」

酒入は聞いちゃいない。

「ほんとうに あきら やさしい」

必死で訴えると、二人に哀れむような優しい瞳で見つめられた。

「ケインさん、俺らの前でまで無理しなくていいよ。ゲイでもマゾでも偏見はないからさ」

「そうだよ、ケイン。個人の性癖なんて大したことないんだから」

勘違いで慰められ、言っても聞きいれてもらえず、アルは俯くしかなかった。三人の間に、重苦しい沈黙が流れる。

「で、何の話をしてたんですっけ？」

三谷が不意に口を開いた。

「えっと……ああ、そうだ。ケインさんに続投をお願いしたことだよ。反対している親玉の暁はこっちを完璧無視だし、あいつの親友で忽滑谷って刑事がいるんだけど……」

「忽滑谷さんなら俺も知っています。殺人事件の時に話をしたんで。かつこい刑事さんですよね」

「そうそう、その忽滑谷も暁と同じ相当の食わせモンでさ。暁と渡りをつけてほしいって言っても『本人と直接話してよ』って逃げてはばっかりでさ」

……暁がドラマ出演を反対する本当の理由は、アルに脱獄という過去があるからだ。顔が売れて、メディアへの露出が多くなったら、逮捕されてしまう可能性がある。逮捕だけならまだしも、自分の正体がばれたらそれこそ、全世界をあげての大騒ぎになってしまう。

アルは吸血鬼だ。それに「できそこない」というおまけがつく。完璧な吸血鬼は、蝙蝠こうもりや人型と自由自在に体の形を変えられるが、アルは昏間は蝙蝠、夜は人間と自分の意志とは関係なく体が変わってしまう。不老不死っぽく、怪我をしても傷は治るのだがとにかく痛い。おまけに沢山の血を飲まないと体は修復しない。それなのに血を吸う牙が生えなかつたので血の入手が一苦労だつた。体が変化するので仕事も長く続かず、友達もできず、流れ流れて牛のと殺場に住み着き、殺された牛の血をすすり、獣のような惨めな生活を長く続けていた。輸入牛肉に交じって日本にやってくるまでは。

今はエンバーマーである暁の職場にアルバイトで入り、エンバーマーミングされるご遺体の処置を手伝う傍ら、廃液として捨てられる血液を食料として分けてもらっている。アルバイトとはいえ働けるし、食事もできるし、友達もできた。日本に来てからのアルの生活は劇的に変わり、人らしい生活になっていた。

そして人は……いや、吸血鬼だとしても、現状には満足しない生き物だ。生活が安定すると、アルは人間だつた頃の、俳優になリたかつたという夢を思い出した。そして偶然に偶然が重なり、日本で俳優デビューを果たしてしまつた。……脱獄犯だとわからないよう、もとの顔がわからないぐらいメイクは施されてしまつてるが。

そしてアルは暁に恋をした。自分を人間らしい生活に引き戻してくれた、口が悪くてすぐに手が出るくせに、優しく意外に世話焼きの男の傍にずっといたくなつたのだ。アルがそういう自分を意識したのは、暁に恋心を寄せる男、室井むらいが現れてからだ。

暁を好きになつたのが女の子なら諦めもついたかもしれない。けれど同性の男なんて絶対に嫌だ。それなら吸血鬼の自分でもいいのではないかと思つたのだ。

「そこで、ケインさんから暁を説得してもらえないかな。まひろの吸血鬼役、とつてもよかつたんだよ。演技はどつちかかっていうとオーバーなんだけど、それが原作のクラシックな雰囲気と合つて不思議と違和感がないっていうかさ。前回の放送のあと、あの悪役吸血鬼は誰なんだって沢山の問い合わせがきたんだ。視聴者はね、ケインさんを求めているんだよ」

作品が好評だつたのは嬉しい。演技を誉められると悪い気はしない。暁には「下手くそ」と鼻先で笑われたけれど、やってみたい。だけど……。

「ぼく、いつても、むり、あきら、ゆるしてくれない」
アルは首を横に振つた。

「言ってみなきゃわかんないだろう。堅物のあいつも、愛するケインさんの言うことなら聞くかもしれないし」

「それって、無理な気がする」

三谷はクールに口を挟んだ。